

解答と採点基準

問1 a 〓紛(う) b 〓しめなわ c 〓さと(す) d 〓地鎮祭 e 〓円環

問2 「カミ」は、畏怖と魅力の両極感情を引き起こし、縄文以来の日本の基層信仰の対象となる、各地域に存在する霊的存在であり、人智を越えた自然の森羅万象を包括するもの。

A・C・Dがなければ全体〇。

A 〓3 / B 〓2

C 〓2 「各地域に存在」がなければ減点。「霊的」は必須。

D 〓3 「森羅万象」との関連は必須。

問3 アは偶然に霊的な純粋さを持つ者が現実世界から異界へと入り込むのに対して、イは「カミ」との交流を強く祈り、意識的に異界へと入り込むという違い。

A・Bがなければ全体〇。「入り込む」は「道が通じて入り込む」としても可。

A 〓5 / B 〓5

問4 あらゆるいのちが「カミ」の霊性から分かれて顕現したものとということ。

A・Bがなければ全体〇。

A 〓5

B 〓5 「与えられ、現実に姿として現れたもの」も可。

問5 森のヌシ神として存在するトトロと、純真な人間の子供が、同じ霊性を持つ者として、交信できる不思議な場所。

Dがなければ全体〇。

A 〓2 「存在する」は「棲まっ」でも可。

B 〓2

C 〓2

D 〓4 「ヌシ神」と「子供」の前提と「交信できる場所」は必須。

問6 生命の宝庫としての「鎮守の森」のような里山や小さな祠は、日本人の民間信仰の日常と生活文化と生活風景そのものであり、これを護るべきだと思わせる作品。

A・C・Dがなければ全体〇。

A 〓3

B 〓2

C 〓3 「民間信仰」と「生活」は必須。

D 〓2

『となりのトトロ』に描かれた世界から日本文化について論じた評論

里山や祠、鎮守の森というのが点在していたころの日本の風景の中に、誰もが出会えるわけでもない不思議な存在のトトロが登場する。トトロと関わりながら、そうした自然の森羅万象の中に生きる人間を描いた宮崎駿の思想性には、宮沢賢治

や南方熊楠の作品や活動と通じるものがある。現在は失われつつある、かつての日本の姿とは、日本人とは、具体的にどのようなものであったのか、この文章から読み取ることができよう。そして改めて『となりのトトロ』を鑑賞してみるのもいいかもしれない。

【考察】

問1 (漢字の読み・書き取り)

a の「紛う」は音便化したもので、もともとは「まがう方なし」。まちがえようがない、という意味。漢字としては難度が高い。

b の「しめなわ」も難しい読み。

c の「論ず」は言い聞かせて悟らせるの意味。

d の「地鎮祭」は建築の基礎工事にかかる前に、土地の神を祭って工事の無事を祈る祭事のこと。

e はまるくつながっている形のこと。「生態学的サークル(美輪)」(144行目)から意味あいを考えてみるとよい。

問2 (内容把握)

「カミ」について考察を始めるのは、「さて、日本人にとって『カミ』とは(31行目)からである。

・「カミ」とは『超すこいモノ』：特定の聖なる感情や情報や力や現象など霊的各ファイルすべてをまとめて取り込む『聖フォルダ』なのだ(41～44行目)と述べられている。

・「自然の森羅万象の動きとはたらしきの中に霊性：最終的に、『カミ』という包括『フォルダ』の中に折りたたまれ(52～54行目)とある。

↑(つまみ)

・「自然の森羅万象」の中に霊性を感知して「包括」したものの、「ファイル」したものと説明されている。

そうした「カミ」についての見方が「縄文時代の精霊的信仰…基層信仰を成している(56～57行目)とも述べられている。

・「怖いけれども、魅惑的で…相反する感情を生起させるものこそ『カミ』(118～120行目)とも説明がある。

設問の「文章全体」ということを考慮すると、後半の「鎮守の森」についての説明においても、「カミ」は小さな地域の森の細部に宿り給う(187～188行目)として、日本各地に「宿る」とも述べられている。そうした内容を「カミ」を中心にまとめる。

問3 (箇所の説明)

それぞれの傍線部は、アが「メイ」、イは「サツキ」における「交通」のこと。傍線部イの直後にあるように、「トトロと交信した」具体的な方法について説明することを求めている。アの「メイ」に関しては、傍線部の四行前に「メイはチビトトを追いかけて：偶然トトロの世界に入り込んだ」とあり、イの「サツキ」に関しては、その後「姉のサツキは、行方不明と…意識的にトトロの世界に入り込んだ」とそれぞれ説明されている。基本的にはその「偶然」と「意識的」とが対照的に捉えられればよい。

ただ、傍線部の「シャーマン的」と「プリースト的」の意味についても解答に含める必要があるだろう。「シャーマン」は神との交信を行う巫女のことであるが、大人が会えないトトロに偶然にしても会えてしまうメイとの共通点を探りたいところだろう。純粋さや神に近い立場にいる、というような説明を加えればよい。一方、「プリースト」は神に対して祈りを捧げたり、人々に神の教えを説く役割があるが、サツキの説明中での「祈りを凝ら(28行目)すがそれに当たるだろう。以上をまとめる。

問4 (箇所の説明)

傍線部を含む一文は、「人間」について、「他の動物たちと同じ」「同列・同等である」と述べている。その「同列・同等」と判断する根拠として、傍線部の「いのちの分節・分与」があると理解できるだろう。

傍線部の「分節」とは、あるまとまりの中での構成要素のことであり、「分与」は分け与えることの意味。人間も、動物と同様に「大いなるいのち」の構成要素の一つであり、分け与えられた存在であるという内容を述べたものとなる。

次に、この段落全体をみたとき、「いのち」として人間の存在は動物と同等とする考えは、『となりのトトロ』の中に具体的に描かれているとされ、それは「縄文的な基層信仰」(58行目)に基づくものと述べている。

「基層信仰」↓同じ一文の中で「そうした日本の『カミ』観」から成るものとして説明している。

＝
前段落では、「自然の森羅万象」の中に「霊性」が「生成」され、「いのち」が分け与えられる「何らかの姿」動物や人間の姿に「顕現」(明らかに現れ出ること)しているというふうなもの。
そして、その「霊性」が「カミ」という存在に包括されているとしている。
←
傍線部の解釈としては、「自然の森羅万象」の中にある「カミ」として束ねられている「霊性」から、「いのち」が分け与えられて、動物や人間という姿として「顕現」しているということになる。

これらをまとめる。

問5 (内容把握)

文中の「鎮守の森」については、前半後半ともに述べられているが、設問は「トトロならびにサツキとメイにとつて」と限定されている。トトロにとつては、自らが棲まう場所になるが、サツキとメイとの関係から考えると、両者が出会い関わる場所と言えるだろう。「交信する場所」がやはり基本となる。それについては、問3での指摘のように、「シャーマン的」や「プリースト的」に「交信」する、という点から、やはり「サツキとメイ」は「霊的な、特別な」存在として描かれていると解釈できる。その点に言及して、解答を作る。

【筆者】

鎌田 東二(かまた・とうじ) 一九五一年。徳島県生まれ。哲学者、宗教学者。上智大学クリーフケア研究所特任教授・放送大学客員教授・京都大学名誉教授。水神祥みなかみあきの名で小説も書く。著書に『宗教と霊性』(角川選書)、『宮沢賢治「銀河鉄道の夜」精読』(岩波現代文庫)、『神と仏の出逢う国』(角川選書)などがある。

【出典】

『ジブリの教科書3 となりのトトロ』 (文春ジブリ文庫 二〇一三年)
「Part 4 作品の背景を読み解く」より「鎮守の森から見たトトロ論」

◎問6 (内容把握)

筆者の『となりのトトロ』に対する評価については、本文の冒頭から述べられている。その後で、「日本人の民間信仰の日常と生活文化と生活風景を…描き切」(7～8行目) ったとしている。

「民間信仰」とは

「トトロ」によって代表されるような、自然の森羅万象の中での霊的な存在としての「カミ」に対するもの
「宮崎駿監督と南方熊楠と宮沢賢治に相通じるもの」
賢治―「森の『ヌシ』たちにお供えを捧げて挨拶する」(111行目)
熊楠―「清らかな感覚と日本の風土の良さを感得させ」(169行目)る「鎮守の森」を「生命の宝庫としての神社の森」(174行目)として護ることに腐心
宮崎駿監督―本文の最終段落「この南方熊楠の論点とその運動は、『鎮守の森』を護る…宮崎駿監督の作品の思想性にも深く通じている」

←
トトロの棲む「鎮守の森」を大切に思い、護る気持ち

これらの内容をふまえ、「民間信仰の日常と生活」及び「鎮守の森」に関してまとめればよい。

【要旨】(103字)

鎮守の森のヌシ神であるトトロと、それを敬う人々の登場する『となりのトトロ』には、かつての日本の民間信仰や生活風景が描かれており、鎮守の森を護ろうとした賢治や熊楠の活動と宮崎監督の思想性には通じるものがある。